

東本願寺

東本願寺は、日本で最も大きな仏教の宗派のひとつである浄土真宗の大谷派の本山である。正式名称は「真宗本廟」で、浄土真宗の開祖である親鸞（1173-1262）の墓所からお寺がはじまったことに由来する。

運命の移り変わり

親鸞の霊廟はもともと、現在の京都市東部の大谷にあった。曾孫の覚如（1270-1351）は、この霊廟を寺院化した。本願寺と名付けられたこの寺は、第8代門首の蓮如（1415-1499）の指導下で繁栄し、その勢力を大幅に拡大した。しかし蓮如の早い成功は、皇室において伝統的に最も政治的影響力のある仏教宗派である天台宗にとっては脅威とみなされた。そのため、天台宗の僧侶たちは本願寺を破壊し、蓮如を京都から逃亡させたが、これを機に浄土真宗の教えをさらに京都の外に広めていくことになった。

その後、本願寺はまず京都とその後大阪で再興されたが、いずれも政敵に焼き討ちされた。しかし浄土真宗は屈せず、16世紀後半に日本で最も権力を持っていた武将・関白 豊臣秀吉（1537-1598）の保護のもと、京都に本山を再建したのである。

東西の分裂

本願寺が京都に戻って間もなく、故人となった顕如（1543-1592）の後継者をめぐる内部対立が長期にわたる政争に発展し、結果的に本願寺を分裂させた。秀吉は後継者争いの仲裁を依頼され、顕如の長男・教如（1558-1614）が門首の座を降り、代わりに弟の准如（1577-1630）が就くべきだと判断した。

1598年に秀吉が亡くなると、彼の盟友である徳川家康（1543-1616）が天下統一を果たした。退位した教如は家康に協力を約束し、本願寺の東にある京都の土地を与えられた。家康は1603年まで日本を支配する徳川幕府を設立し、教如は与えられた土地に自らの本願寺を設立した。この新しい寺院は、准如の（西）本願寺と区別するために、東本願寺と呼ばれるようになった。幕府はこの分裂を承認し、ある程度後押ししたことで、浄土真宗全体の政治的影響力は低下していった。

東本願寺の現在

東本願寺は、1602年に教如が創建して以来、現在の場所で存続している。その後、4度の火災に見舞われ、最近では1864年に消失した。現在の大きな建物である御影堂と阿弥陀堂は1895

年に、巨大な御影堂門と少し小さめの阿弥陀堂門は 1911 年に完成した。御影堂には親鸞が祀られ、阿弥陀堂には浄土真宗の中心的存在である阿弥陀如来の像が安置されている。境内から東へ数分歩いたところにある渉成園は、17 世紀から寺の一部として使われており、1864 年の火災後に現在の形に再建された。